武士住宅の配置・平面原理

都市独立住宅の配置・平面原理に関する計画史的研究 (その1)

THE PLINCIPLE OF PLANNING IN THE SAMURAI HOUSE

A study on the plinciple of planning in the urban detached house Part 1

大岡 敏昭*, 青木 正夫**

Toshiaki OOKA and Masao AOKI

In the present study, we investigated the "samurai's house" which can be considered as the origine of the urbane detached houses of Japanese cities.

Results can be summarized as follows;

- (1) Zashiki is facing the entrance of the grounds no matter which direction
- (2) This planning is generally seen in many feudal clan
- (3) These houses are open to the all directions keeping the continuity between the houses and gardens. This is extremely different from the modern houses which are rather closed to the surroundings.

Keywords: urban detached house, samurai house, plinciple of house planning

都市独立住宅, 武士住宅, 配置・平面原理

1. 序文

図1は熊本市に建つ現代の都市独立住宅である。東西道路に面する南入りと北入りの屋敷である。住宅はどちらも北側に詰め、南側を精一杯空けている。平面構成は座敷、居間などの居室を南に面し、北には台所、浴室、便所の水まわり空間を配置している。このような配置と平面は、熊本市だけでなく現代における都市独立住宅の一般的傾向といえるであろう。

とくに問題は北入り住宅である。南入り住宅においては道路側に一定の庭が確保されるが、北入り住宅においては道路側の空地はかなり狭い。その結果、東西道路における街路景観は不統一で偏った町並みを呈している。そして、狭い屋敷の北側に面して水まわり空間を並べるために、屋敷北側と玄関まわりが閉鎖的で狭苦しい感じとなっている。これは、南入り住宅が開放的で入り易い雰囲気有するのに比べて対照的であり、近隣コミュニケーションの支障も考えられる。また、屋敷の入口側は、本来、外に面した表の領域である。しかし狭い屋敷北側には玄関と水まわり空間が混在しており、住宅における表-裏の空間秩序の混乱がみられる。それに、屋敷入口条件の相違に関係なく座敷を含めて各居室を南に機械的

図1 現代の都市独立住宅(熊本市)

に配置することは、平面構成の固定化を生み、その多様な発展を妨げている。このことは地域性の消滅と画一化にも繋がるといえる。

* 熊本女子大学生活科学部生活環境学科 教授
・工博

** 九州産業大学工学部建築学科・教授・工博

Prof., Dept. of Environmental Design, Faculty of Living Science,
Kumamoto Women's Univ., Dr. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Kyushu
Sangyo Univ., Dr. Eng.

以上にみた配置・平面の考え方は、家族生活空間を重視するがために居室をできるだけ南面し、少しでも日照を確保するという「南方位重視」にある。しかしながらそれに偏重しすぎると、古来、日本住宅の良さでもあった住宅と外（庭、近隣）との様々な面での関連性をなくし、結果として先に述べた問題を含めて閉鎖的な住宅に陥る危険性を内包している。その意味で北入り住宅だけでなく住宅配置のあり方全体の問題といえよう。

では、このような都市独立住宅の源流についてはどうであったか。周知の如く、現代の都市独立住宅は江戸時代の武士住宅、明治以降の中流住宅の影響を物質、精神の両面で受けている。また一方で欧米の近代合理主義的な住宅計画の影響も受けてきた。従って、この住宅配置の考え方が古来から継承されてきたものであるのか、或いはその後の変化によるものかを見極めることは、歴史的継続性をもつ住生活および住空間の今後の展開を考える上で重要である。

図2は、明治後期に建てられた福島市の北入り住宅（官舎）である。座敷と（客間）と次の間（居間）は南に位置しているが、茶の間と4.5畳の部屋は北に位置している。即ち、住宅の南に接客空間を、玄関のある北に家族生活空間をとるという平面原理である。このような平面にやがて中廊下が設けられ、さらに北にあった家族生活空間が南に移動し現代の都市独立住宅に発展してきたと考えられるが、座敷の位置に着目すれば、それが南に位置している点において図1の現代の都市独立住宅と同じ原理といえる。重要な部屋を南に設けるという考えである。

ところが、さらに遡って、江戸時代後期の武士住宅を図3の高遠藩の事例にみると、その原理は全く異なる。北入り住宅であるが、接客空間の座敷は屋敷入口（門）のある北にとられ、しかも座敷の縁の向きも北である。恐らく北庭が広く設けられていたと考えられる。一方、家族生活空間の茶の間、部屋、納戸は南に設けられている。即ち、北が表であり、南が裏である。これは、先にみた現代と明治後期の都市独立住宅とはちょうど配置・平面原理が逆になっている。このように武士住宅の配置・平面は、屋敷前公道－屋敷入口（門）－玄関－座敷という接客順路が重視され、その結果、北入り住宅において北座敷の平面が成立したものと考えられる。重要な部屋を北に配していたのである。このような配置・平面の考え方が当時の武士住宅の一般的傾向であったかどうかは住宅計画史における極めて重要な課題と考えるが、仮にそうだとすれば、北入り住宅において明治以降に配置・平面原理の一大変化が展開したことを意味し、その時期と要因の解明も大きな課題となろう。そのことは更に、冒頭に述べたところの現代住宅の様々な配置計画における問題点の成立根拠を解明することに繋がり、問題解

図2 明治後期の都市独立住宅（福島市）

図3 江戸時代後期の武士住宅（高遠藩）

図4 昭和初期の都市独立住宅（福岡市）

決への方途が探られよう。

そこで、明治以降における先に述べた配置・平面原理の変化の時期的問題であるが、福岡市における昭和初期の北入り住宅を図4にみると、北に接客空間の座敷、南に家族生活空間の寝間と茶の間が設けられており、この原理は図3にみた武士住宅のものと同一といえる。福岡市では武士住宅と同じ原理のものが昭和初期まで建て続けられていたことを窺わせる。また明治後期に建てられた森鷗外旧住居（借家）が北九州小倉に残されているが、この平面も北入りで北座敷の住宅である。このことから、明治以降の都市独立住宅の配置・平面原理の変化と時期およびその要因は、地域によって、また計画主体（官舎、分譲、持家）によって様々な展開を呈していたと想定される。

本研究は以上の問題認識に基づき、武士住宅から現代の住宅に至るまで、その配置・平面原理の実態とその意

味およびその変化と要因を計画史的に明らかにし、併せて今後の都市独立住宅の配置・平面のあり方に論及しようとするものである。まず本編においては、都市独立住宅の源流である武士住宅について、南入り、北入り、東入り、西入りのそれぞれの屋敷方位別にその配置・平面原理を明らかにすることを目的としている。とくに、北入り住宅において北座敷をとる住宅が一般的であったかどうか、さらに、現在において南方位重視の考えでイメージの悪い北側が当時としてはどうであったかを考察したい。これまでの明治以降の都市独立住宅の研究蓄積は大なるものがあるが、その主たる視点は平面構成の変化についてであり、屋敷形状を含めてその配置と平面の関係を追求したものはない¹⁾。また武士住宅の研究も地域的に数多くの調査報告が出ているが、明治以降の都市独立住宅との関連でその配置・平面原理について全国的に論及したものは見当たらない²⁾。尚、本編の内容に関しては、既に発表した拙著『武士住宅の平面と方位性、藩制と民家』相模書房（平成元年）、同前『武士住宅の配置・平面原理と都市独立住宅の発展に関する計画史的研究（1～3）』建築学会大会（平成4年）、に新たな史（資）料と知見を加えて再編成したものである。

2. 調査概要

先に述べた本編の目的を明らかにするには全国的に出来るだけ多くの藩を対象とし、しかも1つの藩で出来るだけ多くの住宅史料をみるのが肝要である。纏まって残っている住宅絵図史料としては、高遠（長野県）、弘前（青森県）、盛岡（岩手県）、館林（群馬県）の各藩のものがあり、それを収集した。また数は少ないが庄内（山形県）、浜田（島根県）、秋田（秋田県）の各藩の史料も収集できた。さらに、鹿児島知覧、米沢（山形県）、臼杵（大分県）、岡（同）の各藩に現存する武士住宅の復元調査をおこなった。その概要を表1と2に示す。

表1 絵図史料一覧

藩名	現所在地	史料名	居住地	史料に掲載している戸数と史料作成年代	史料所蔵
高遠	長野県高遠町	御家中屋鋪絵図	城下町	261 天保～嘉永(1830～1853)	高遠町立図書館
弘前	青森県弘前市	御家中屋鋪絵図	城下町	1069 宝暦6年(1756)	弘前市立図書館
盛岡	岩手県盛岡市	藩士屋敷并建家図面書上	城下町	557 文化3年(1806)	盛岡市中央公民館
館林	群馬県館林市	史料タイトル不明	城下町	42 江戸末期	館林市立図書館
庄内	山形県鶴岡市	個別住宅絵図	城下町	4 天保12年(1841)～慶応元年(1865)	鶴岡市立図書館
浜田	島根県浜田市	個別住宅絵図	城下町	1 江戸末期	浜田町立図書館
秋田	秋田県秋田市	個別住宅絵図	城下町	1 江戸末期	秋田県庁
〃	〃	土木課事務簿	城下町	23 明治11年(1878)	秋田県庁

表2 復元調査一覧

藩名	現所在地	居住地	調査戸数	調査年
鹿児島	鹿児島県知覧町	郷土館源	8	平成4年
米沢	山形県米沢市	郷土館源	25	昭和50年
臼杵	大分県臼杵市	城下町	20	昭和50年
岡	大分県竹田市	城下町	5	昭和57年

3. 配置・平面の分析視点とその分類方法

屋敷入口方位別に配置・平面を考察するために、屋敷入口（門）と座敷との位置関係に着目した。過去現在を

図5 武士住宅の配置・平面の型分類

通し、都市独立住宅における住生活の内容は大きく分けて家族生活、接客生活、祭祀行事の3つでみることができよう。これらの生活領域が時代によって変化してきたといえる。この接客生活と祭祀行事の空間的核といえる座敷を屋敷入口（門）との位置関係から捉え、併せて家族生活空間の茶の間、寝所の位置関係を考察することで、その配置、平面原理を規定するところの注意意識が推察できると考えた。そこで、屋敷入口方位別に座敷の位置関係を分類したのが図5である。配置・平面の型は正面型、背面型、両面型の3つに分類した。まず正面型は、屋敷入口方位の違いにかかわらず屋敷前公道－屋敷入口（門）の側に面して座敷が設けられている型である。南入り住宅の場合は南に座敷が位置するが、北入り住宅は北に座敷が位置する。背面型は屋敷入口（門）側とは反対の側に座敷が設けられる型である。北入り住宅の場合は座敷が南に位置し、先にみた現代と明治後期の住宅と同じ原理の平面となる。最後に、両面型は屋敷入口側とその反対側の両方に座敷が面する型である。この場合、壁ではなく座敷の縁が両方に面していることを条件としている。東と西入りの場合は若干複雑になる。同じ正面型、背面型でも座敷の位置が北に面する北座敷型と南に面する南座敷型に分かれる。尚、方位は屋敷入口を基本にして分類し東西南北の4つに纏めた。以上の分類を基にして以下に考察を進める。

4. 絵図史料からみた武士住宅の配置・平面

本章では高遠、弘前、盛岡、館林、庄内、浜田、秋田の各藩の絵図史料を対象にして当時の武士住宅の配置・平面を考察する。

（1）高遠藩の武士住宅³⁾

高遠藩の武士住宅絵図としては「御家中屋鋪絵図」4冊（261戸）が残っている。絵図にはその作成年代は明記されていないが、絵図に記載されている居住者名と明確に分かっているその子孫との関係から幕末天保期前後のものと推定できる⁴⁾。当時の武士が約280人であるのではほぼ全体を示すものと言える。絵図には住宅平面（但

し間取りの記入は159戸、その他に住宅の外枠のみの記入102戸)の他に居住者の氏名、方位、それに町名と屋敷位置(例えば、荒町北側東より何軒目)が記載されている。平面のみで配置図はないので、幕末のものとみられる城下屋敷割り絵図(町名も記載)に、その場所に該当する住宅平面を挿入し配置図を作成した

表3は間取りが記入されている159戸のうち、方位と座敷が不明の2戸を除いた157戸について、屋敷方位別にその配置・平面をみたものである。周知の如く、武士住宅は階層によって住宅規模と平面構成が異なる。下級武士の住宅は農家住宅と余り変わらないものが多いが、中上級の武士住宅では玄関、次の間などの接客空間が整備され、その藩独自の平面を成立させている。高遠藩の場合、式台を持つ「玄関」と控えの間的な「寄附」が中級以上の武士住宅に接客構えとして設けられているが、その有無によって配置・平面の型が異なるので、それぞれに分けて分類した。

まず玄関または寄附のある住宅をみると(上段の数字)、南入りの場合は南に座敷を設ける正面型が多いのは当然の事であるが、敢えて北に座敷を設ける背面型の住宅が数は少ないが4例みられるのは驚かされる。図6は上級武士(御年寄)の南入りの住宅である。南に玄関と寄附が設けられ、玄関一次の間一座敷へと繋がっている。座敷縁も南に面し、その前が庭であろう。一方、茶の間、部屋、奥の家族生活空間の領域は北にとられている。このように南入り住宅の場合、表は南に、裏は北に位置するという構成である。

次に北入り住宅をみると、屋敷入口(門)がある北に座敷を設ける正面型が圧倒的に多い。しかも座敷の縁の向きも北向きが多い。図7は、前図の住宅とは通り(荒町)を挟んでその南側に位置する北入り住宅である。玄関一次の間一座敷の接客空間が屋敷入口側の北に、茶の間などの家族生活空間はその南に設けられている。つまり北が表で南が裏の論理である。明治以降の都市独立住宅の発展の1つに家族生活空間(とくに茶の間)の南面化が言われているが⁵⁾、既に江戸後期において北入りの武士住宅では結果的ではあるがそれが果たされていたと言える。

以上は中上級武士(100～150石)の居住地である荒町通りの住宅であるが、中下のクラス(50～100石)の居住地(下夕町)の北入り住宅が図8である。前の2つの住宅には玄関と寄附の両方が取られていたが、このクラスの住宅は玄関と寄附が併用である。また座敷1室だけで次の間をもたない住宅も多い。しかし、このように接客空間が簡略化し奥行き2列構成の平面が基本である中級の下のクラスの住宅においても、屋敷入口に面する北が玄関一座敷の接客空間であり、その南が茶の間、奥、部屋の家族生活空間である。正面型の原理に強く貫

表3 高遠藩武士住宅の配置・平面の型

屋敷入口方位	屋敷入口方位別にみた門、玄関と座敷の位置関係の型 正面型 背面型				西面型
北入り	(北座敷)	座敷の向き 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東	座敷の向き 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東	座敷の向き 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東	座敷の向き 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東
計18戸 (14)	17 (5)	14 (4)	2 (1)	1 (8)	1 (6)
南入り		座敷の向き 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東	座敷の向き 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東	座敷の向き 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東	座敷の向き 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東
計21戸 (14)	17 (10)	15 (1)	1 (1)	4 (4)	2 (2)
西入り	座敷位置 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東	座敷の向き 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東	座敷の向き 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東	座敷の向き 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東	座敷の向き 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東
計33戸 (17)	25 (3)	8 (2)	17 (1)	3 (1)	6 (7)
東入り	座敷位置 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東	座敷の向き 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東	座敷の向き 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東	座敷の向き 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東	座敷の向き 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東 北・南・西・東
計29戸 (11)	18 (1)	5 (1)	14 (1)	1 (1)	8 (9)

(※1) 各欄の上段の数字は、玄関(寄附)のある住宅の戸数を示す。

下段の数字は、玄関(寄附)がなく土間入口の住宅の戸数を示す。

(※2) 座敷の向きの戸数には、L型の場合は2つの方向に向いているので、両方に含めた。

図6 高遠藩武士住宅(南入り・正面型) 64.0坪

図7 高遠藩武士住宅(北入り・正面型) 51.5坪

図8 高遠藩武士住宅(北入り・正面型) 47.9坪

ぬかれているといえる。

東と西入りについてはどうか。玄関または寄附をもつ住宅はどちらも正面型の方が多くみられる。しかし、南、北入りほどには顕著ではなく、背面型も若干みられる。これは玄関－寄附－次の間－座敷の空間構成を横方向にとる結果、背面型となっても接客順路において矛盾しないからと思われる。その東入りと西入りの正面型の事例が図9と10である。とくに注目すべきは座敷の位置である。東、西入りの住宅では座敷を南に面しても良いと考えられるが、実態はそうではなく、北に座敷を設ける例が多くみられる。重要な部屋を敢えて北に配しているのである。また住宅と外との関係を見ると、どの方位に面している部屋であっても、部屋と外とが縁などを介して開放的に繋がっている。

一方、玄関または寄附を持たない下級武士の住宅（下段数字）をみると、南入り住宅を除いて逆に背面型の方が多くなっている。その事例を図11に示しているが、下級武士の住宅はこのような狭小な住宅が一般的である⁶⁾。茶の間を中心としてその奥側に座敷と物置（寝所であろう）を設けた平面であり、農家住宅の原型的平面の3間取り広間型に類似している。農家住宅との違いは通り土間がないことである。床のない座敷も多く、接客構えも整っていない。しかもこのような平面では入口から座敷へ行くには家族生活空間の茶の間を通らざるを得ない。従って、接客領域と家族生活領域の未分化ゆえに座敷の正面性はあまり問題にならず、結果として背面型が多くなっているものと考えられる。しかし図12の住宅においては屋敷入口正面に向かって座敷と茶の間を並べ、その座敷は屋敷入口側の北にとり正面型の平面となっている。この場合、客は茶の間を通らず直接座敷前の縁から入ることも推察される。また平面構成も、先にみた中上級武士住宅の原型的平面である。その意味で背面型の多い下級武士住宅の中で接客構えの整備された正面型への過渡的住宅といえよう。因みに高遠藩の下級武士住宅はこれらの2つの住宅に分類されるが、後者の住宅（55戸中31戸）ではやはり正面型が多くなっている（20戸）。

（2）弘前藩の武士住宅⁷⁾

弘前藩の絵図史料「御家中屋鋪建家図」は、高遠藩の絵図よりさらに約80年程遡った宝暦6年(1756)のものである。記載されている1069戸（配置・平面の両方が記載されている）のうち座敷が明確に読み取れる792戸の住宅について分類した。

表4は屋敷入口方位別にその配置・平面の型をみたものである。高遠藩の武士住宅では玄関の有無によって配置・平面の傾向が異なっていたが、弘前藩の武士住宅は玄関の有無にかかわらず正面型への傾向が強い。まず南入り住宅をみると、屋敷入口のある南側に座敷をと

図9 高遠藩武士住宅（東入り・正面型・北座敷）54.2坪

図10 高遠藩武士住宅（西入り・正面型・北座敷）41.7坪

図11 高遠藩武士住宅
（北入り・背面型）17.0坪

図12 高遠藩武士住宅
（北入り・正面型）16.5坪

る正面型が殆どであるが、北入り住宅においても屋敷入口の側に座敷をとる北座敷の正面型が圧倒的に多い。それに座敷の縁も同じく北向きがかなり多い。図13は南入り住宅である。接客空間の玄関－広間（玄関の間の部屋で高遠藩における寄附に相当する部屋と考えられる）－座敷は1列に並んで南側の屋敷入口（門）に面し、常居、台所などの家族生活空間は奥の北側に取られている。玄関は屋敷入口（門）に向かって正面に位置するのではなく横から入る形式が多いのが弘前藩の住宅における特徴といえる。図14は、前住宅と通り（若党町）を挟んでその南側に位置する北入り住宅である。座敷－広間－玄

表4 弘前藩武士住宅の配置・平面の型

座敷入口方位	座敷入口方位別にみた門、玄関と座敷の位置関係の型								両面型				
	正面型				背面型								
北入り	(北座敷)				座敷の向き				北	南	西	東	
計	158	2	1	5	北	南	西	東	北	南	西	東	
162戸				7	150	-	4	7			-	-	
南入り	(南座敷)				座敷の向き				北	南	西	東	
計	135	2	1	5	北	南	西	東	北	南	西	東	
141戸				3	-	128	4	3	4		2	-	
西入り	(西座敷)				座敷の向き				北	南	西	東	
計	217	166	29	22	北	南	西	東	北	南	西	東	
231戸				3	51	15	187	3	4	4	11	-	
東入り	(東座敷)				座敷の向き				北	南	西	東	
計	247	192	32	23	北	南	西	東	北	南	西	東	
258戸				7	111	-	7		5	5	3	5	1

(※1) 緑の向きの戸数には、L型座敷の場合は2つの方向に向いているので、両方に含めた。
(※2) 座敷向きの中は、北と南向きのどちらにも属さない住宅である。

図13 弘前藩武士住宅
(南入り・正面型) 48.0坪

図14 弘前藩武士住宅
(北入り・正面型) 32.0坪

図15 弘前藩武士住宅
(西入り・正面型・北座敷) 43.0坪

関の接客空間は前事例と同じく、1列に構成され北側の屋敷入口（門）に面して設けられている。常居一物置（寝所であろう）の家族生活空間はその南である。また、前にみた高遠藩の武士住宅においては、屋敷入口側に面する玄関と並んで日常的に家族の出入りする土間入口も設けられていたが、弘前藩の場合は奥の方へ大きく回り込む形式である。それだけ屋敷の正面空間を接客領域に大きく専有している配置・平面といえよう。

次に東、西入りの住宅においても正面型が多く、その場合の座敷の位置も高遠藩の住宅と同じく北がかなり多い。図15、16はその事例である。屋敷入口の側に座敷一玄関の接客空間を配置し、その奥に居間、下居などの家族生活空間を設けている。そして座敷は北に位置し、縁も北に面している。図17は、下級武士の2室しかない狭小な併列型住宅である。北入りであるが、その併列の方向は縦にとり、入口のある北側に座敷を、その南に居間を設けている。狭小住宅でも正面型の構成を明確に示しているのである。

(3) 盛岡藩の武士住宅⁸⁾

盛岡藩の絵図史料として文化3年（1806）の「諸士屋敷并建家図面書上」があり、それを分類した。記載されている住宅の調査年はそれよりも古い安永期（1772～）からのものである。表5はその絵図に記載されている657戸のうち座敷が明確に判断できる住宅523戸について分類したものである。盛岡藩の住宅も玄関の有無と配置・平面の型との関連が認められなかったので一括して屋敷入口方位別にその配置・平面をみた。

まず南入り住宅をみると、南に座敷をとる正面型が多いものの、北に座敷をとる背面型も少なからずみられる。しかも北縁である。北入り住宅については、屋敷入口側とは反対の南に座敷を設ける背面型が先にみた高遠、弘前藩より増えるが、やはり北座敷をとる正面型の方が多い。東、西入り住宅についても正面型の傾向にあるが、座敷の位置は高遠、弘前と違って南が多くなる。図18は

図16 弘前藩武士住宅
(東入り・正面型・北座敷) 33.0坪

図17 弘前藩武士住宅
(北入り・正面型) 5.0坪

表5 盛岡藩武士住宅の配置・平面の型

屋敷入口方位	屋敷入口方位別にみた門、玄関と座敷の位置関係の型 正面型	座敷の位置関係の型 背面型	併列型	両面型
北入り 計 144戸	座敷の向き * 1 北・西・東・南 64 14 24 14	46	座敷の向き * 1 北・西・東・南 46 2 2	9
南入り 計 163戸	座敷の向き 北・西・東・南 133 17 25	15	座敷の向き 北・西・東・南 9 1 2 4	4
西入り 計 99戸	座敷位置 * 2 北・西・東・南 21 52 1 3 32 60 11	18	座敷位置 * 2 北・西・東・南 6 12 1 10 1 11	7
東入り 計 117戸	座敷位置 北・西・東・南 20 82 1 3 32 60 11	13	座敷の向き 北・西・東・南 4 8 1 5 9	2

(*) 1) 座敷の向きの戸数には、L型の場合は2つの方向に傾いているので、両方に含めた。
(*) 2) 座敷位置の中は、北と南向きのどちらにも向きがない住宅である。

図18 盛岡藩武士住宅
(南入り・正面型) 33.5坪

図19 盛岡藩武士住宅
(北入り・正面型) 32.2坪

南入りの正面型の住宅である。玄関と座敷は南側にとり、北側には14畳程度の広い部屋（茶の間あるいは常居のような部屋であろう。）が設けられている。図19は北入りの正面型であるが、玄関と座敷が北に面し、茶の間と思われる12畳程度の広い部屋は南側に面している。その左の4.5畳の部屋も恐らく家族の寝所的な部屋であろう。

図20は北入りの背面型である。座敷は玄関のある北側ではなく南である。これは図2の明治後期の都市独立住

宅と類似しているとも言えるが、茶の間とみられる部屋（座敷の横の9畳）が座敷と同じく南に設けられている点が異なっている。北入り住宅の背面型の住宅における家族生活空間は南に面するのが多い。また、前述したように、絵図に記載されている住宅は安永元年から文化3年の34年間のものであるが、正面型、背面型の戸数と年代との関係は全くみられず、2つの型が同時に建て続けられていたといえる。

（4）館林、庄内、浜田、秋田藩の武士住宅

館林藩の絵図には、独立住宅と長屋の両方が記載されている。そのうち42戸が独立住宅の平面であり、それを分類した。絵図には平面と方位、氏名が記載されているのみでタイトルと作成年代は不明である。しかし絵図記載の氏名と「旧館林藩士族祿高職氏名一明治4年」の中の藩士氏名と一致する例が多くみられることから、絵図は幕末のものともてよい。館林藩は横長の城下町の形状から東西道路が多く、従って、南、北入りの屋敷が多くなっている。表6によると、南入り住宅については正面型が多いが、北入り住宅については背面型の方が多くなっている。しかし北座敷の正面型も3割程みられる。図21は100石取りの中級武士の住宅で、北入りの正面型である。北に玄関一玄関の間（3畳）一次の間（6畳）一座敷（8畳）の接客空間が横1列に配置されている。家族生活空間は恐らくその南の3畳－2畳－6畳の各部屋であろう。同じく北入りであるが背面型の住宅が図22である。北の式台玄関から入り、6畳の玄関の間を南側の座敷6畳に至る。一方、家族生活空間は土間南側のイタマ－3畳－8畳（茶の間と思われる）の部屋である。このように館林藩においても、背面型は接客空間ばかりが南側を専有するのではなく、家族生活空間の茶の間と思われる部屋も南側に設けられている。

次に庄内藩の絵図は幕末のもの4枚が保存されている。その内訳は、①天保12年、山内氏（200石）、西入りの正面型・北座敷、②嘉永2年、水野氏（家老）、南入りの正面型、③嘉永7年、山崎氏（足軽）、北入りの正面型、④慶応元年、竹内氏（600石）、北入りの正面型、である。そのうちの2枚は北入り住宅であるが、2枚とも北座敷の正面型である。③の事例が図23である。座敷と次の間が北側に面し、次の間の前に玄関が設けられている。家族生活空間の部屋（茶の間と思われる）と奥（寝所であろう）は南である。このように、下級武士の住宅であり、農家住宅の田の字型平面に類似しているが、北に座敷を位置する点で農家住宅とははっきりと配置・平面の考えが異なる。このことは浜田藩の武士住宅にも言える。

浜田藩の絵図の年代は不明であるが、浜田町立図書館では幕末天保期のものと推定されている。図24にその事例を示すが、北入り住宅で正面型の北座敷である。この

図20 盛岡藩武士住宅（北入り・背面型）28.2坪

表6 館林、庄内、浜田、秋田藩武士住宅の配置・平面の型

藩名	分析に使用した戸数	座敷入口方位別にみた門、玄関と座敷の位置関係の型
館林	戸建て住宅42戸の座敷のうち、方位不明2戸、座敷不明1戸を除く39戸	北入り住宅20戸（正面型7戸、背面型12戸、両面型1戸） 南入り住宅17戸（正面型15戸、背面型1戸、両面型1戸） 西入り住宅1戸（背面型1戸）、東入り住宅1戸（正面型1戸）
庄内	4枚の絵図	北入り住宅2戸（正面型2戸）、南入り住宅2戸（正面型2戸）
浜田	1枚の絵図	北入り住宅1戸（正面型1戸）
秋田	土木課事務簿に記載されている23戸のうち、座敷位置の判別分3戸と個別絵図1戸の計4戸	北入り住宅4戸（正面型3戸、背面型1戸）

図21 館林藩武士住宅（北入り・正面型）30.2坪

図22 館林藩武士住宅（北入り・背面型）26.5坪

図23 庄内藩武士住宅（北入り・正面型）27.0坪

図25 秋田藩武士住宅（北入り・正面型）44.2坪

図24 浜田藩武士住宅（北入り・正面型）20.0坪

住宅も平面は農家住宅の広間型に類似している。しかし、入口は北の土間であり、2畳敷の玄関の間が設けられていることなど武士住宅特有の平面になっている。最後に秋田藩の絵図は明治11～13年の県事務簿によるものと県庁に保管されている絵図の中から座敷と方位が判明する4戸についてみると（表6）、4戸とも北入りであるが、そのうちの3戸が北に座敷を設けている正面型である。その1例を図25に示すが、明瞭な正面型の平面といえよう。

5. 復元調査住宅からみた武士住宅の配置・平面⁹⁾

本章では、鹿児島藩知覧と米沢藩の在郷武士住宅、および臼杵、岡藩の城下町武士住宅を復元調査資料から考

察する。前章で述べた絵図史料の作成年代はかなり明確であったが、複元調査においての年代は推定でしかない（江戸後期から明治初期）。しかし式台玄関が設けられている住宅も多くみられ、本研究の補完的資料としては有効であろう。寧ろ絵図と異なって、住宅配置、庭のとりかた、街路景観など実態としての武士住宅に接近できるという利点がある。

まず、鹿児島藩における知覧（麓集落）の在郷武士住宅である。東西道路に面して多くの武士住宅および明治期の都市独立住宅が残されている。

調査した8戸の住宅の配置・平面の型を表7に示しているが、南、北、西入りの全てにおいて道路側に面して座敷を設ける正面型であり、その典型事例が図26である。知覧の武士住宅は農家住宅を含めてこのような曲り家の構成に特徴がある。南入りの住宅（永崎氏）は明治初期のものと考えられ、南に座敷（オモテ）一次の間が面し、家族生活空間は北にナンドーオスエ（茶の間の空間）が設けられている。恐らく江戸後期の武士住宅もこのような平面であったと思われる。その南側の北入り住宅（佐多氏）は前図の住宅をちょうどひっくり返したような配置である。即ち、屋敷入口の北に面して次の間（ニノオモテ）－座敷（イチノオモテ）が取られている。接客用の玄関としては、ナカノマの前に上がり段が設けられている。一方、家族生活空間はその南のウチザイマーナンドであり、イマ部分は曲り家になっている。この地域の農家住宅もこのような平面構成であるが、座敷の位置は南またはそれに近い方向である。たとえ屋敷入口が北側にあってもわざわざ南に回り込んで入るように配置する。このように、平面は農家住宅と類似するが配置の仕方において異なる。従って、道路側に向かって互いに庭と座敷を面するように配置している知覧の旧武士住宅街における町並み景観は、今日の都市住宅団地における北入り住宅の狭小な道路側の景観とは異なって、道路の両側に庭が広がるのびやかで統一のとれた景観を呈している。

次に、知覧と同じ在郷武士集落である米沢藩の芳泉町場合をみってみる（図27）。この集落は南北道路が多い形状ゆえに東、西入り住宅が主体である。屋敷の広さは間口6間と奥行25間に統一されている。25戸の調査事例のうち24戸が東、西入りともに道路側（屋敷入口側）に座敷を面するという正面型の配置・平面である。残る1例もそれと類似する両面型である（表7）。平面はどちらも南に座敷をとりその北が寝所である。この平面も農家住宅の前座敷系住宅に類似しているが、座敷前に式台玄関を設けている点で農家住宅とは異なっている。けれども最も大きな相違は、やはり知覧と同じく道路に面して重要な部屋（座敷）を互に向かい合わせするという配置・平面にある。従って、この米沢藩の在郷武士集落

表7 鹿児島、米沢、臼杵、岡藩武士住宅の配置・平面の型

戸名	口数戸数	口数方位別にみた門、玄関と座敷の位置関係
鹿児島・知覧	8	北入り住宅5戸（正面型5戸） 西入り住宅1戸（正面型1戸・両面型） 南入り住宅2戸（正面型2戸）
米沢	25	南入り住宅12戸（正面型11戸、両面型1戸） 西入り住宅13戸（正面型13戸）
臼杵	20	北入り住宅4戸（正面型3戸、背面型1戸） 南入り住宅9戸（正面型6戸、背面型3戸、うち北座敷4戸） 南入り住宅3戸（背面型3戸） 西入り住宅4戸（背面型4戸、うち北座敷4戸）
岡	5	北入り住宅2戸（正面型1戸、その他1戸） 西入り住宅2戸（正面型2戸、うち北座敷1戸） 南入り住宅1戸（正面型1戸）

図26 鹿児島藩在郷武士住宅（北、南入り・正面型）

図27 米沢藩在郷武士住宅（東、西入り・正面型）

図28 臼杵藩武士住宅（北入り・正面型）30.7坪

においても知覧同様に統一された落ち着いた町並みになっている。

最後に臼杵藩と岡藩の北入り住宅を図28、29に示すが、両藩とも北入り住宅においては北に座敷をとる正面型が多い。とくに臼杵藩では南入り住宅でも北に座敷をとる背面型が多くみられ、この藩においても北に座敷を設ける傾向が多くみられることが注目される。

6. その他の調査報告書にみる配置・平面

前章までにおいて、著者が調査した絵図史料と復元調査資料から江戸後期の武士住宅の配置・平面を屋敷方位別に考察してきたが、さらに他の研究機関が調査した報告書に掲載されている武士住宅図面についても参考のために触れておく。表8はその概要を示したものである。これによると、岸和田、笠間、岩城、安中、村上、津山、金沢、松本、佐倉、名古屋の全ての藩で北入り住宅が調査されているが、その殆どが北側に座敷をもつ正面型の配置・平面である。そのうち金沢藩では、住宅正面に向かって小規模のタテ2列型とタテ3列型に分類されるが、タテ2列型では住宅の正面間口巾が狭いゆえに屋敷入口とは反対側に座敷をとる背面型多い。しかし規模の大きいタテ3列型になると、3戸の北入り住宅全てが北座敷の正面型となっている。このように、本研究以外の各調査報告書にみる武士住宅においても正面型の配置・平面の傾向にあり、とくに北入り住宅では正面型の北座敷が圧倒的に多くみられるのである。

7. 結論

①江戸時代中後期の武士住宅の配置・平面原理は、どのような屋敷入口の方位であっても、屋敷入口側に面して玄関一座敷などの接客空間を配置するという正面型が一般的であったといえる。従って問題の北入り住宅は、北側が表として玄関一座敷の接客空間が配置され、南側は裏として茶の間、寝所などの家族生活空間が配置されている。これは現代の北入り住宅の配置・平面の考え方は全く逆である。

②ただし、この傾向は藩によって若干の相違がある。高遠、弘前、庄内、浜田、秋田、鹿児島知覧、米沢、岡の各藩で正面型の傾向が強いが、盛岡藩では正面型が多いものの背面型も少なくはない。また、逆に館林藩の住宅においては背面型の方が多くみられる。従って、正面型の一般的傾向の中で藩によっては現代の型に通じる背面型も同時に存在していたといえる。しかしそのような背面型の藩は他の研究機関の調査書も併せみてかなり少数とみてよい。

③その正面型が普及していた時期であるが、江戸中期に作成された弘前藩の絵図では殆どの住宅が正面型であり、さらに江戸後期の高遠藩の絵図においても中・上級で極

図29 岡藩武士住宅（北入り・正面型）48.6坪

表8 諸報告書にみる武士住宅の配置・平面の型

藩名	報告書資料名	発行者	掲載図面の配置・平面の型
岸和田	城下町としての岸和田市 (18~19p 掲載図面)	岸和田市教育委員会	北入り住宅1戸(正面型1戸) 南入り住宅1戸(正面型1戸)
笠間	民俗文化財5、住居の部 (18~22p 掲載図面)	笠間市文化財愛護委員会	北入り住宅1戸(正面型1戸) 南入り住宅2戸(正面型2戸)
岩城	岩城町復元保存住宅 (松村家、橋本家)	岩城町天徳村に隣接	北入り住宅1戸(正面型1戸) 西入り住宅1戸(正面型1戸)
安中	旧安中藩御奉行所の建屋 (2p 掲載図面)	安中市教育委員会	北入り住宅1戸(正面型1戸)
村上	第4章・村上の武士住宅 (重要文化財若林家修理 工事報告書) (49p 掲載 図面)	村上市教育委員会	北入り住宅(正面型2戸、背面型1戸) 南入り住宅(正面型2戸、背面型1戸) 西入り住宅(正面型1戸)
津山	津山の町並み (22~38p 掲載図面)	津山市教育委員会	北入り住宅2戸(正面型2戸) 南入り住宅6戸(正面型6戸)
金沢	金沢の歴史的建造物と町並 (21~60p 掲載図面) *方位は未記入のために 調査者の増田氏に確認	金沢市教育委員会	*タテ3列型 北入り住宅3戸(正面型3戸) 南入り住宅5戸(正面型4戸、背面型1戸) 東入り住宅4戸(正面型2戸、背面型2戸) 西入り住宅1戸(正面型1戸) *タテ2列型 北入り住宅2戸(背面型2戸) 南入り住宅1戸(背面型1戸) 東入り住宅1戸(背面型1戸)
松本	民家調査調査結果 (6~17p 掲載図面)	松本市教育委員会	北入り住宅2戸(正面型2戸) 東入り住宅2戸(正面型1戸、不明1戸) 西入り住宅1戸(正面型1戸)
佐倉	佐倉の武家屋敷 (30p 掲載図面A5)	財・観光資源保護財団	北入り住宅1戸(正面型1戸)
名古屋	名古屋市長史跡地区 調査報告書 (25~31p 掲載図面)	歴史環境研究会	北入り住宅2戸(正面型2戸) 西入り住宅3戸(背面型3戸)

めてその傾向が強い。また正面型の多い他の藩の絵図と諸史料をみてもその時期は江戸後期である。従って江戸中期から後期にかけて正面型が当時の武士住宅の配置・平面原理として一般化していたと考えられる。

④東、西入りの住宅では全体として正面型、背面型にかかわらず、座敷の位置が北側にとられる傾向が強い。北入り住宅における北座敷の一般的傾向を含めて、重要な部屋を北側に配していたのである。このことは、北側に対する考えが現在とはかなり異なっていたことが窺われる。

⑤武士住宅における各部屋と外との繋がりは開放的で連続性を有している。例えば縁は座敷のみならず家族生活空間の常居、茶の間などに設けられている例も多く、また寝所とみられる各部屋にもみられる。それらの部屋は全方位に面しており、部屋の位置と内容にかかわらず外庭との関係が強く意識されていたと考えられる。このことは現代の住宅が全体的に外との繋がりが希薄で閉鎖的傾向にあるのに比べて対照的といえよう。

8. 謝辞

絵図の複写など多くの資料を提供して戴いた高遠町立

図書館、弘前市立図書館、盛岡市中央公民館、館林市立図書館、鶴岡市立図書館、浜田町立図書館、および復元調査をお願いした鹿児島知覧、米沢芳泉町、臼杵、岡の各藩における武士住宅の居住者の方々に心から御礼申し上げます。また武士住宅についての問い合わせに快く答えて戴いた旧藩城下町のあった298 市町の各教育委員会と参考にさせて戴いた表11の各調査報告の関係者の方々に記して感謝の意を表します。

(注)

1) 明治以降の都市独立住宅に関する研究としては、主たるものとして、木村徳国氏の「日本近代都市独立住宅様式の成立に関する史的 research、北大工学部研究報告、昭和33年」、青木正夫らの「中流住宅の平面構成に関する研究、住宅建築研究所報告、昭和59年」がある。

2) 中・下級の武士住宅の研究としては、佐藤巧氏の「近世武士住宅、叢文社、昭和54年」、大河直躬氏の「江戸時代の中・下級武士住居と近代都市住居－日本建築の特質、中公美術出版」などがある。また各教育委員会でその地域の武士住宅の報告書が多く出されているが、本研究の視点で捉えたものはない。

3) 高遠藩の武士住宅については、既到大河直躬氏らによる以下の研究報告があり、分析史料としての住宅絵図は大河氏らが最初に取り上げたものである。

大河直躬・丸山純『高遠藩「御家中屋鋪絵図」の検討(その1・表示形式と階層的特徴)』日本建築学会学術講演梗概集(北陸)・昭和58年9月

丸山純・大河直躬『高遠藩「御家中屋鋪絵図」の検討(その2・中規模住宅の間取り)』日本建築学会学術講演梗概集(北陸)・昭和58年9月

4) 絵図には各居住者の氏名が掲載されているが、その中に下級武士(御徒士格)の伊沢勝三郎の名前がある。この住宅は現在も町で保存されている。その子供の伊沢修二(後に東京音楽学校校長)は嘉永4年に生まれており、その事からこの絵図は幕末の天保～弘化～嘉永期の間に作成されたものと思われる。

5) 平井聖『図説日本住宅の歴史』95p、学芸出版社

6) 玄関のある住宅は平均7.4 室、46.5坪であるが、玄関のない住宅は2.9 室、23.2坪である。

7) 弘前藩の武士住宅については、これまで以下の研究があり、住宅絵図についても佐藤氏によって最初に取り上げられている。

佐藤巧『武士住宅と土間(土座)－弘前藩の例』日本建築学会論文報告集・第89号、昭和38年9月

同『近世武士住宅』叢文社・昭和54年

草野和夫・他『弘前の町並み(Ⅲ. 市内に残る武家屋敷の現況)』昭和55年・弘前市教育委員会

同『弘前の町並み(Ⅳ. 武家住宅遺構とその変遷の概要)』昭和56年・弘前市教育委員会

同『弘前の町並み(武家屋敷)』昭和52年・弘前市教育委員会

8) 盛岡藩の武士住宅については、佐藤巧氏の以下の研究があり、住宅絵図についても佐藤氏によって最初に取り上げられている。

佐藤巧『盛岡藩における上級武士住宅の間取り形式に就いて』

日本建築学会論文報告集、第57号、昭和32年

同『近世武士住宅』叢文社・昭和54年

9) 知覧の武士住宅については、以下の詳細な調査報告がみられる。伊藤行・他『知覧武家屋敷町並み』昭和51年・知覧町教育委員会
土田光義・他『知覧麓の武家屋敷群』平成4年・知覧町教育委員会

(1993年10月5日原稿受理, 1994年3月1日採用決定)